

彩の歳時記

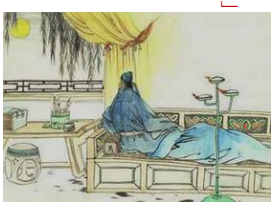
平成二十七年 十一月

「静夜思（せいやし）」は中国唐時代の李白の詩で「早發白帝城」と並ぶ有名な作品。

静夜思
李白
床前明月光
疑是地上霜
举头望明月
低头思故乡

「床前月光を見る疑ふらくは是れ地上の霜かと頭を挙げて山月を望み頭を低れて故郷を思ふ」
「寝台前に差し込む月の光を見てみると、まるで地上一面の霜と見間違えうほどだ。」
振り仰いで山の上の月を眺め、うつむいては故郷のことを懐かしく思い出す。

日に日に夜が長くなってゆく十一月、来し方・行く末を静かに思う季節ですが、街頭は早くも年末気分、華やかなイルミネーションが競うよう
と静かな休息のバランスを取りながら、日々の生活を楽しまたいものです。



十一月の暦

霜月 霜降り月の略

二日 白秋忌

近代を代表する詩人・歌人、北原白秋【1885～1942】の忌日。生誕130年。

与謝野鉄幹・晶子主宰の「明星」に詩・短歌を発表、新人筆頭に。童謡は千曲余り
作詞、成田為三・山田耕筈らによって作曲。「砂山」「からたちの花」「この道」
など。詩集に「桐の花」「邪宗門」鈴木三重吉創刊「赤い鳥」の童謡を担当。
死の前年に一家四人で柳川に帰郷した時もからたちの美しさに心惹かれ生垣のある
道を歩いたという 福岡県柳川の実家が記念館として現存。

三日

紅葉薦黄ばむ【七十二候】

三日 文化の日「国民の休日」戦前の明治節(明治天皇の誕生日)。皇居では文化勲章の授与式。

前後日に文化庁主催の芸術祭が開催。

五日

一の酉 酉の市は鳳神社の年中行事。「春を待つ 事のはじめや 酉の市」と
宝井其角詠んだように、正月を迎える最初の祭。浅草鷲神社が有名。



八日 立冬

【二十四節気】太陽の光が弱まり、冬枯れの景色が目立つように。季語には「冬立つ」「冬入る」。

十五日

七五三

近世までは乳幼児の生存率は低く、生存を祝う節目とした。三歳は髪を伸ばす
「髪置（かみおき）」、五歳は初めて袴をつける「袴着（はかまぎ）」七歳は本仕立ての
着物と丸帯で「帯解（おびとき）・紐落（ひもおとし）」が七五三の礼装の名残。



十七日

二の酉

午前零時に打ち鳴らされる「一番太鼓」で始まり、終日、執り行われる。

二十二日

小雪

【二十四節気】冬とは言え、まだ雪はさほど多くないという意味。

二十三日

勤労感謝の日【新嘗祭・にいなめさい】元は収穫を神に感謝する日。



一葉忌

近代女流作家の嚆矢、樋口一葉【1872～1896】の忌日。名作「たけくらべ」
の舞台になった台東区竜泉に「一葉記念館」・「にぎりえ」の舞台の近い文京区の
「文京一葉会館」で、講演会・朗読会などの記念行事開催。



二十九日

三の酉

「火事が多い」という迷信があるが根拠は無い。

十一月の歌

旅人よ 詞 岩谷時子 曲 弾厚作 昭和十二年(1966)

弾厚作は加山雄三【1937～】のペンネーム。岩谷【1916～2013】は既に
作られた曲に歌詞をつけるタイプの作詞家。深い想像力と豊穡な言葉で

「愛の讃歌」「恋のバカンス」などの名曲を世に送り出した。加山とのコンビでは
『君といつまでも』『お嫁においで』など。2009年に岩谷時子音楽財団を設立
「岩谷時子賞」の授与「メモリアルコンサート」などを開催。

風にふるえる 緑の草原
たどる瞳輝く 若き旅人よ
お聞きはるかな空に鐘が鳴る
遠い故郷にいる母の歌に似て
やがて冬が冷たい雪を運ぶだろう
君の若い足あと
胸に燃える恋もうずめて
草は枯れても 命果てず
君よ夢を心に 若き旅人よ

